地震の経験と避難所

―― 非日常の中の日常：1995年西宮（14）――

原　田　隆　司

Experiences in Public Shelter after the Earthquake

―― Ordinary Lives in Extraordinary Situations in Nishinomiya, 1995（14）――

HARADA Takashi

Abstract : This is a part of a research project on our experiences of the Great Hanshin-Awaji Earthquake in 1995. In this paper I have focused on the memories of a woman and her daughter who evacuated to the public shelter where I attended for eight months as a voluntary staff just after the quake.

Many evacuated people had gathered in a room of gymnastics in a junior high school. From there many people commuted to their workplace. The woman had looked after the room and distributed stuffs. After moving to a temporary house, she was keen to take care of the neighbors. Her daughter, who was then a student of primary school, had different memories of the earthquake and the public shelter. She enjoyed daily life in extraordinary situations just like ordinary situations.

Thirteen years had passed since the quake, but even now she and her daughter are in bad health when they smell the soil. Because they were rescued after buried by rubble for several hours.

2008年９月，西宮市内の市営住宅に住む大石さん（仮名）と会った。13年ぶりである。

現在60歳の大石さんは，夫と23歳の娘の３人暮らしである。大石さんと僕は，1995年の地震の直後に西宮市内の中学校にあった避難所で会い，言葉を交わすことも多く，その年の夏に仮設住宅を訪ねたこともあった。その後も毎年の年賀状で，当時小学校３年生であった一人娘の春子さん（仮名）が中学生，高校生，大学生と成長し，2008年の春には大学を卒業するということを伺っていた。13年半という歳月は，それだけの長さである。

避難所

大石さんは，中学校の体育館の１階にある格技室という部屋に避難していた。中学生が柔道や剣道をする場所である。

最初はもう足の踏み場もなく，横になって寝なかった，座ったまま寝るしかなかった。私らは着の身着のままで，近所の人が持って来はった布団に一緒に入らせてもろてた。

最初は，前と後ろに別れた感じになってたけど，段々一体化してきたみたい，人数が減れば減るほど。人数減ってきたら，やれトイレの掃除当番やとか，ごはん取りに行く人は，とか，最初の頃，うちら前に居たから，どうしても主人と私が立っていかないとしょうないねん。まわりを見たら，みんなお年寄りやねん。［教室のある別棟の］職員室のほうまで取りに行って持って帰ってきたら，わーってくるでしょ。こっち［体育館］に食事が来るようになって，朝はパンで取りに来てください，夜は弁当を取りに来てくださいっていうようになってからはね，弁当当番が多少はできたけどね。

大石さんの話を聞いて，春子さんも当時のことを思

い出す。

〔春子さん：寝る時に，電気を全部消すか，消さないかって，何かあったよね。〕

大石さんが説明してくれる。

今まで真っ暗で寝てましたでしょ。それが，［3日目に］電気点くようになったので，誰が消すのか，どこを1つ点けとくべきか……。1カ所2本か3本，電気点けとくのはいいけど，その下に居てる人は「寝られへん」と言う。だから常に移動させなあかん，不公平になるから（笑）。でもそれを真剣に考えてたんですから，その時は。今でこそ笑い話になりますけどね。その頃はもう真剣ですもん。

仮設トイレを誰が洗うかとかね。そら，こっち〔体育館〕のトイレになった時も，トイレ掃除誰がするか，となった。「入り口から順番にしていきましょうか」と言うたびに，「私らばっかりしてる」って言わはんのね。「人が入れ替わるから，私らばっかり掃除してる」言うて，おばちゃんらが文句言わはんねん。あの部屋はお年寄りが多かった。

避難所は生活の場である。いろんなことがあった。

ひとりのおばちゃんは，仕事から帰ってくると，「ちょっと」って呼ぶから，何かと思ってると，「551の餃子」くれはんねん。餃子とね，納豆，ようくれはったわ。「これ食べ」言うて。納豆は，私よう食べんから，上の大学生の子どもさん居てる奥さんに持って行ってた。おばちゃんには「嫌いです」とはよう言わんし，やっぱり言いにくいし。「ありがとう」って貰うでしょ。

びっくりしたのは，そのおばちゃんのところ，大げんかしてた。夜やから，みんな静かにしてるでしょ，そこに，うちとこまでピューと靴下が飛んできた。「今行ったらあかん，今行ったらあかん」て，みんなが言う。ものすごい夫婦喧嘩やっとる。よそにも投げてはんのんやけど，「流れ弾」がこっちに来た。それで，朝ね，そうろっと持って行った。

避難所から仕事に行く人も多く，昼間は人数が少なかった。大石さんが，ある高齢の兄妹のことを話してくれた。女性のほうが毎朝早く仕事に出ていた。

朝の4時半か5時頃にね，避難所出ていかはんねん。足音させんように，みんなを起さんように，そろっと出て行ってはった。［神戸市東灘区の海沿いの］深江まで行って，コンビニのお弁当を作ってはった。外人さんが多いらしい，ああいう所で働いている人って。ものすごい収入が違うんだって。おばちゃんはベテランもベテラン。よう動ける人やなって感心してた。帰ってくるのは早かった，お兄さんの世話をしてはったからな，えらいなあと思て。仮設に入ってからも，よう訪ねてきてくれはったしね。

この女性と親しくなったのは，ちょっとしたきっかけがあったという。

そのおばちゃんはね，リンゴ。私も何でか分からんけど，囲いを作るようになった頃，ふっと見たら，リンゴが置いてあったの，1個，その囲いの上にね。

格技室では最初は個別の所帯を隔てるものもなかったのであるが，次第に段ボールなどで囲われるようになった。

「誰やろう，誰やろう，分からへん」って言うとった。裏側は酔っぱらいやったし，そんなんが置く訳ないし。酔っぱらいが居るから，あれ［囲い］したんやし。そいで，後ろ向いたらね，そのおばちゃんが，指を指してる。「私が置いたんやんか」って言うようになってから，喋るようになった。

何でくれはったかは分からへんかったけど，後で考えたら，お弁当の世話をしとったから，主人が仕事に行くようになってからは，私が弁当の世話をしてたから。それから，避難所から仮設に行く時，段ボール要るでしょ，その段ボールの分配もしてた。お弁当を持ってきた箱，この箱は今回はこの人ね，次の空き箱はこの人ねって。箱欲しいってみんなが言ったから。みんな引っ越したいし，だんだん荷物も増えてくるし。

大石さんは格技室での食べ物や物資の配分をしていた。20所帯くらいであっても，公平に分配するのは簡単ではない。

ゆで卵を1つずつ配ったのに，一人のおばあさんが，隠して，また取りにくる。「おばあさん，あんた取ったでしょ」って。それも，うちの隣の人も，

こっちの人も，みんな見てんねん。「あの人取ったよ，取ったよ」って言うねん。私に言えということやね（笑）。しゃあない，言わんと。おばあさんだって，悪気があったんちゃうよ。掃除当番も，あのおばあさんだけ飛ばしててん。で，こっちのおばあさんがね，なんであのおばあさん飛ばして，私せなあかんの，あの人のほうが私より若いんよって。そういうのもあったんです。

仮設住宅などへ引っ越す所帯も出てきて，大石さんは，部屋全体の留守番役になっていった。

残ってる人は，おばあちゃんでも仕事持ってる人が多かった。当然，私が家に居るみたいな感じで，あそこのお留守番みたいな感じになってん。だからみんな「ただいま」言うて，私が「おかえり」言うて（笑）。そういう存在になってしもうて。だから私，自分が出かけたい時ね，この荷物どうしようか思てね，誰か変な人が入ってきて盗られへんか，鍵閉めるようにせなあかんとなって，そやないと私も出かけらへんって。他のところで聞いたんですね，盗られたいうて。終わりごろ鍵かけるようにしてませんでしたか？

グランドに車を置いて生活している人たちもいた。そうした人とも大石さんは接触があった。

キャンピングカーでずっと寝起きしてはる人やった。「弁当だけ取っといて」って。「弁当はおれらはいらん，付属品が欲しい。カップラーメンとかジュースとか，付いてるもんがほしい，弁当はあんたとこにやる」言うて。「ごはんは自分で炊いて食べるから要らん」って。

格技室の人数は，最初は100人くらいであったのが，80人になり，60人になった。市の対策本部から届く弁当は，次第に中に居る人だけの数になっていったが，その前には，かなりたくさんの数が運ばれていた。

落ち着いてしもてからは，みんなが家などに移ってしもてからは，だいたい半分ぐらいになったからね，人数。そしたら余って来ますでしょ，弁当が。人数分，余分に来てるんだから。みんなに配って残った分は，格技室の前に置いといた。そしたら，外で配ってましたやん，あれで貰われへん人が取りに来はるんですよ。「貰ってはらへんの？」って言うたら，他の人が「あの人はどこそこの人やで」と言うて，「家ちゃんとあるねんで」言うて（笑）。「外で配ってはるのにも並んで貰てるらしいで」とかね。あそこであふれたから，取りに来てはるとかね。結構すっと入って来て，すっと持っていきはるんですよ。だから誰かの知っている人かなと思いますやん，最初の頃は。

〔春子さん：堂々としてるねー。〕

どうか分からないから，こっちは。

ーまあいいように理解するもんね，最初は。

みんな善人に思ってますよね。悪い人なんて思ってない。人数も分かって，名前も分かってきますやん。「ちゃんと書いてください」言うて，書くようになって。人数も書くようになって，全部で何人いてる言うて。そうなってきたら，それだけしか弁当来ないからね。余りがないんですよ。でも時々覗きに来はるんよね。で，外でも配らなくなってくるでしょ，今度は，近所の人用というのはなくなったから。こっちに来たら何かあるんちゃうか，ということで来てはった。

春子さんは，当時，小学校3年生であった。

〔春子さん：うちなんか，そういう状況ってことすら知らないから，いつも通り学校に行って，友達と遊んで，帰ってきて，ゲームするか宿題するか，普通どおりにしてた。そういう生活やったから。

学校始まった最初って，私，教科書なかったよね。先生がアンケートじゃないけど，今必要なものは何ですかみたいな項目があったんですよ。で，みんな教科書を持ってるのに，私だけ教科書がなかったから，教科書って書いたんですけど，友達のをみたら，みんな，水とか（笑），そんなん書いてて。あっそうかって，私どれだけ教科書が要ったんって，今，めっちゃ思うけど。みんなに合わせたかったというかね。マンションが多かったから，私みたいな状況の子はいなかったと思う〕

他の同級生とは違っていただろう自分のことについて，こうしてさらりと振り返ることができる強さは，どこから出てくるのだろうか。

避難所は中学校であった。地震の直後に新聞に取り上げられ，その記事にたまたま大石さんの名前も載った。とたんに，宅配便で物資が届くようになった。

相当来ましたもんね。10個じゃきかないん違います？

日本中ということではなくて，関西の人が多かったという。まず，神戸の人が避難所まで持ってきてくれた。大石さんは住所録を見ながら，その時のことを思い出してくれた。

神戸の〔北区〕鈴蘭台（すずらんだい）の人が，わざわざ持ってきてくれはったんですよ，避難所まで。びっくりしましたわ。若い人だったんです。「お父さんに車に乗せてきてもらった」と言うて，朝の8時頃かな，私はまだ寝てたんですよ避難所で（笑），それで，「なにー」と言うて。向こうは親切で来たのに，こっちは何よーって感じで，その時は寝ぼけてたからね，急いで，その頃はまだ，このままで寝てましたでしょ，服装。だからピャっと起きて，「お父様にもご挨拶させていただきます」言うて，車の所まで行って。「がんばってください」「ありがとうございます」。向こうもさっと帰らはって，何か自分の仕事に行く前に来はったらしいんですよ。どういう人かも聞かず，向こうも急いではった。

新聞記事をきっかけに，大阪府堺市，広島，神戸などから物資を送ってくれたほとんどの人は，一回だけであった。大石さんは，お礼の手紙を出した。何人かの人は，その後も送ってきてくれた。

堺のおばちゃんだけは，仮設に入ってからも送ってきてくれはるから，もういいですよとは言ったけど。仮設に移りましたいうて手紙出したら，また送ってきてくれはるからね，それでもう終わると思たら，また次送ってきはって，お年玉まで入ってたから，そこまでしてもろたら，あかんから。

この〇〇さんという人もそうや。仮設に来てからも，この人と途切れたんは，市営に入りましたいうたら，途切れた。それまでは，宅急便いうても果物，ここは岡山やから，ぶどうとかナシとかを送ってきてくれはって。おとうさんの名前になってるけど，このYさんいう人が学校の先生なんですって。春子が小学校の時は中学校の先生やって，春子が中学校のとき，もうすぐ卒業やっていうときに，小学校の先生にならはった。この人にしたら，春子と行き来というか，手紙のやりとりをしたかったみたいなんですよ。そっちの学校はどんなんですかって，訪ねてくるんですけど，うちの子，手紙出さないんですよ（笑）。で，私，奥さんやと思たから，送ってくれはったら電話しますでしょ，電話に出たのはお兄さんやったんですよ。若い人やったんですよ。私は独身やと思わへんから，そんなんしてくれはる人はおばさんやと思てるから……。

そうした行為を大石さんは，どういうふうに受け止めたのだろうか。

気持ちはありがたいね。中身は，今やから言えるんやけど，私ら肥えてるから，サイズ的に合わないんよ，服は。これくらいやろうと自分のお古を，大人用のを，送ってくれはるから。子どもはまだ小さすぎるし。それで，避難所に居てはる他の人にあげたんよ。一人は，そのスーツ着て就職しはった。「入社式に着る服がない」って言わはったから，「ちょうどこれスーツあるし，これ着て行き，ちょうど合う」と言うて，サイズが（笑）。

―大石さんのところで使ったものは？

お鍋が入ってたり，そういうのは使った。

―そういう人から連絡あるのは，励ましにはなった？

そうそう，まだ心配してくれてはると思てね，悪いなと思うんやけどね，つい甘えてしまって。

―堺の人とか電話かけてきたりとかすると嬉しい？

そら嬉しい。だからね，あの岡山の人がね，果物送ってきてくれはったんがね，マスカットとか，近所に配らなあかんのね，それぐらい量が多いから。もう，いつも悪いなあと思てた。こっちから何もできひんし。で，こっちが市営に移ったとたん，こっちが年賀状出そうが，ぷつっと切れたんのが，寂しかったけどね（笑）……

多くの人は1度送るということで，自分としては「協力した」と思えるだろう。もっと継続的にしてあげようという人も居たのであるが，ずっと続けるということはない。避難所から仮設住宅へ，仮設住宅から市営住宅へと大石さんの住所が変わるたびに，相手の人たちが「切る機会」を探していたのではないか，と大石さんも受け止めていたのである。

同じように，僕たち「ボランティア」も，「切る」タイミングを探していたのではないか，と大石さんが話してくれた。僕が一緒に「ボランティア」をしてい

たAさんという女性と，大石さんの仮設を訪ねた時のことを思い出したという。

Aさんが仮設に来はった時に，ちょうど先生〔筆者〕にね，「いつ切ります」いう話をしてたんよ，二人で。要は，いつこのボランティアというものを，この避難所とか仮設に居てた人を「切る」かというタイミングの話をしてはったんですよ。そいで，ああそうよね，いつか切らないと，永遠にいう訳にはいかないんで，みんな生活，個々の生活あるんやから，ボランティアはボランティアの生活あるんやから，いつまでも関わってられへんわなと思て，どうなんかな思て……。

僕は覚えていなかった。地震から半年間，避難所があったのだが，最初の2ヶ月ぐらいが過ぎたあたりから，避難所がいつまで続くものなのか，そして僕たちもいつまで「ボランティア」をするのか，そうしたことを雑談のなかで話したことは幾度もあった。始めること，続けることと同じように，終わることも自分たちで考えなければならないことであった。

1995年の阪神・淡路大震災のあとも，日本の各地で，そして世界でも，大きな地震がある。

この間から，しょっちゅうあるけど，地震が，去年も一昨年も。やっぱり行けへんよねって。旅費使うて，どっから出る訳でもなし，旅費使うて，自分の食べる分もあれせなあかんのに，ボランティアに行くかあ，いうて，それだけのお金の余裕も，心の余裕もない。

うちらの震災の時にね，学生さんがようさん来はったでしょ。「ボランティアしてるとね，就職とかにええらしいよ」とか，「単位もらえるんよ」って。そんなん言う人もいた。「あの子ら，汚いよね，そんなこと考えて来てんの，そんな気持ちでボランティアやってんの」とか言う人もいた。

「ボランティア」のほうは一生懸命であったのかもしれないが，それがどう受け止められるのかということは，また別の問題である。あの地震の際に一躍脚光を浴びたとされる「ボランティア」であるが，それが現場でそう単純に受け止められていたのではないということが，よく分かる。

鳥取県の人から温泉に来ませんかという誘いが避難所にあり，10人位の人が参加したことがあった。大石さんも3人で参加した。鳥取砂丘に行き，公民館に泊まり，地元の人が出してくれたカニすきも食べた。

また来よなってみんなで言うとったんよ，だから私，その次から年賀状出しとったもん。この，むつみ荘に出してるから何の返事も来うへんけどね。あ，このウエダさん，むつみ荘のウエダさん宛に年賀状書いてた。向こうから返事なんか来うへん。来るわけないよね。こっちの名前聞いても，向こうは「はあ？」って思てる。ボランティアの人じゃあないねんから。

後で分かってん，この人ら，朝，私らを迎えて連れて行くために，前日から来て，「コンクリートしかない，寝るところのない，その上に毛布敷いて寝ました」言うから，私らよりもっと冷たいやん，まだこっちは畳の上に寝てるもん。だから前日から来て，わざわざそういうコンクリートの上に寝て。そんなことまでしてくれはってん。私らもう慣れてきて，畳の部屋やったし，あの部屋は特に，そんなコンクリートの上の冷たいとこで寝てないねんけど，と思て。そこまでしてくれてはるんやと思った。そらもうすごいと思てさぁ。もし自分が反対の立場やったら，そこまでようせんもん。

その後，城崎温泉からも招待があり，それは旅館に泊まり，食事もそこで出たという。しかし，大石さんは，春子さんの学校が始まっていたこともあり，参加しなかったという。

こうして大石さんは，いろいろな「助け」をしてくれた人たちとの接触を続けようと考えていた。しかし，この温泉からの招待のように，相手の人たちは，避難所や「ボランティア」と連絡を取るだけなのである。「ボランティア」たちのことは記録していても，避難していた人たちの名前は記録もなく，記憶にもないのかもしれない。

仮設住宅

大石さんが住んでいたところ，そしてその近くの避難所から，仮設住宅と現在の市営住宅のあるところまでは，電車を一度乗換えて，全部で10駅，30分ほどである。避難所から移るのは遅かった。

くやしかったのは，仮設に入れなかったこと。抽選なんぼやっても。みんなが当たったんよ，うち当

たらへんかった。

〔春子さん：なんか，格技室のなかに，うちらだけがぽつんと残った。〕

私，すごい落ち込んで，人前も構わず泣いた。他の人，みんな仮設住宅当たってんのに，うちだけ当たってなかって。隣の○○さんか△△さんやったかのお兄ちゃんが，「え，一軒だけ当たってへんの？」と言わはった。落ち込んだ。

対照的に，仮設住宅から現在の市営に移る時には，幸運であった。

一番希望が多かったのは，ここなんですよ。ずっと当たらないんですよ，抽選で。私が4回目でやっとこさ入れたんです。それが100軒中1軒なんです。一戸しか募集ないんですもん，空き部屋だけいうことで一戸なんです。

市会議員の人も一緒になって見に来てくれはったんです。そしたらね，5軒空いてるんです。だのにね，1軒しか募集しはらへんから，掲示されるんです，ふれあいセンターにはり出してくれはるから。見たら100軒なんです。こらもうあかんわ……，その前の抽選は補欠やったんです。それで，これはええかなーと思たんですけどね。

―補欠の効力は切れていた？

［当たった家が］入ってしまわはったら，あかん，ということで。

―じゃあ，ものすごいラッキーやったんですね。

そうです。それでも3年目。

仮設住宅は，どのような構成であったのだろうか。

軒数にしたら，400軒ちょっと。そのうち6割くらいしか住人はいない，後は荷物置き場。要は，借りてはるけど，仮設の権利はとってはるけど，荷物置き場になってたから。実際に居てはったのは，そんなに多くない。

今でも年賀状をやりとりする人は，ちょうど前の人やったんですけど，その人のところとか，一番前の人のところとか，何回も出入りがありました。家が出来て，出はりますでしょ，そしたら，違う人が来はるんですよ。出入りがあるんです。2軒おいて隣もそうだったし。

入居者は，高齢の人が多かった。

ふれあいセンターで，手芸なんかをしてて，だんだん人数が減ってくると，当番制で留守番をしに行かなあきませんのね。私は当番の時だけ行ってたんですけど，その時に一番親しくしてもらってたおばあさんが途中からボケだしてね。市営が当たったいうて出て行って，年寄りやからお金ないからね，年金生活やから1ＤＫの一番ちっちゃいとこに行きはって「遊びに行くわね」って言うてたんですけどね，おばあさんがそんな状態やから，おじいさんが「来てもうても分からへんわ」言うてはったんですよ。「じゃあ，やめときますか」言うて，そしたらおじいさんのほうが亡くなった。息子さんから葉書来て「おやじ亡くなくなりました」言うて。で，おばあさんに言うても分からへんでしょ，じゃあもう止めとこか言うて。

春子さんにとって，仮設住宅から市営住宅への引っ越しは，重要なことであった。行く場所によっては，また転校しなければならないからである。

〔春子さん：被災した家の近くだった小学校から移る時よりも，市営の抽選のときに，よそに移るかもしれんという時のほうが覚えてる。めっちゃ泣いた。転校してすごい仲のいい友達とかできたのに，そこからまた別の所にいかなくちゃいけないという時に，もう離れたくないって。もう最後の1回やったんかなあ，市営の抽選を受けて，それで通ったんやな。〕

地震直後のこと

大石さんは，今回，僕が話を聞きたいとお願いしたので，当時の写真を整理したアルバムを探したという。その話から，地震（1995年1月17日）の時のことに話題は移った。

ちょっとめくったら，1月15日に，自分の実家に行ってるんですね。16日に主人の実家に行って，17日に震災に遭うてるんです。その15日の写真がぱっと見えたから，あっこれやと思て，次めくったらね，地震の時の写真（笑）。

この話に，春子さんが声をはさんだ。

〔春子さん：あ，そや，地震の前日にもらった靴，買ってもらった靴は，あれはなんか覚えてるなぁ。すごく気にいって。赤やった，まっかっか。〕

15日に大石さんの実家に行き，祖母に靴を買ってもらった。さっそく履いて帰ってきて，そのまま玄関に置いておいた。

〔春子さん：地震の直後，避難所に避難してから，何かまだ現実味がなくて，その地震に遭ったとか，家が壊れたとか，そういう現実味が全然なかったから，あの靴どうなったやろうという心配……それをずっと思ってた。「まだ取れないかな」とか考えてた。〕

1月の末，壊れた家を解体し，運び出す作業が行われた。大石さんは，「大事なもん」だけは取っておこうとした。しかし，その作業で見えてる物は，「いらんからしまい込んでいる」ものばかりであった。

要らんからしまい込んでる，しょうむないものが出てきてる訳やから，肝心の要るものは，たとえばこの子の着てた服が〔クレーンの先に〕ぶらさがってる。要るとは言えませんやん。〔解体までの〕期間が短いから，どれが要るんかがわからないんですよ。今やったら落ち着いているから，あの時のあれは絶対取っとくべきやったとかいうのがあるけど……。私は，「思い出やからアルバムだけは出して」とやかましく言うた。それと預金通帳ね。結局，家族のアルバムは出てきて，私だけのアルバムがないんですよ，別に置いといたから。私のアルバムいうても，子どもの時のんですから，別に置いてたんですよ。

毎日家を見にいって，何か取れるもんないかと，お父さんが助けて貰った穴から入って，探してたら，めがねが出てきた。別で置いてた予備の安もんのほうが出てきた。机の上に置いてた高い方は駄目になってた（笑）。

その現場で，次のような有り難い出会いもあったという。

知らん人が通って「これよかったら使うてください」と言わはるんです。「私ね，アイロンないと思って買ったら，あったんですよ」と言うて，アイロンくれはって。いまだに使うてますよ（笑）。ぜんぜん，見ず知らずの人。その人にしたら，これだけ家つぶれて，それが目の前に見えてるし，私ら荷物出してて，この人ら，何もないんやろなと思いはったんやろうね。「アイロンね，私ね，ない思たらね，あったんよね。知らんと買ったからね，2つになってん，どうしよか思てたから使うてください」。よう覚えてる，このセリフは。「いいんですか」言うたら，「いいよ」言うて。それ，いまだ使わせていただいてます。めったにアイロン当てへんから，つぶれへんのですけど（笑）。

春子さんは，その頃のことをどのように思い出すのだろうか。

―赤い靴のことは？

〔靴のことは，あきらめてた。もう，その時は。だいぶ落ち着いてきて，もう全部なくなってしまったんやってなってしもて，あの靴も戻ってこえへんのやってなって，もうそれで終わりっていうか。〕

―地震の時のことって，何を思い出す？

〔避難所のことって言っても，苦しい体験っていうよりも，ほんとに避難所にいる人たちとみんなで一緒にわいわいやってたなっていう感じで。今思えば，だいぶやっぱり親に守られてるっていうか，そういう感じですね，今となって振り返ってみれば。〕

―何か具体的に思い出すことってある？誰かと何かして遊んでたこととか。

〔ＹＭＣＡの人かなあ，やっぱりああいうのは残ってますよね。ほんと私覚えてないですよ。〕

避難所にＹＭＣＡの大学生がやってきて，子どもたちと一緒に遊んでくれた時期があった。

―仮設に移ってからのほうが覚えてる？

〔仮設に移ってからでも，もうほんとに普通の生活になっちゃってるって感じだから，別にそのまんまって感じで。地震といって思い出す……思い出すっていうか，そういうのはあのう，やっぱりその，心のどこかに，わだかまりというか，ほんと地震で全部なくしてっていうのは，思い返してやっぱりそういう，わだかまりというのはありますけどね。完全にそういうのは，ぬぐいさってたと自分では思ってたんですけど，考えれば考えるほど……〕

―でも，ついこの間のことのように，大人には思えるんやけど。

〔どうでしょう，もう，ずいぶん昔の話しって感じですかね，私には。〕

大人にとっては極めて非日常であった避難所での生活も，小学生の彼女には，相対的にはそう変わらない日常だったのだろう。僕の関わった中学校も，隣の小学校も，授業の再開を急いでいた。休校が長引くことが小学生や中学生にとってはつらいことであったということになるのだろうか。再開した後の「ケア」もまた新たな課題となったのであろうが。

13年間の変化

こうして話をしていると，知らない間に時間が経過していた。僕は，最後に，こんなことを質問した。大石さんは，2年前に病気で入院し，手術をしていた。

―病気のこと，仮設から今の市営住宅への引っ越しとか，この12，3年にいろいろとあったので，避難所のことは，昔のこと，懐かしいことと思えますか？

思えるのと，今より，そっちのほうがましやった，金銭的に。いやあ，正直にね，金銭的に余裕があったら，心の余裕ってありますよ。あくせくしない。ところが，あの時のほうがよかったね，避難所のほうがよかった，仮設のほうがよかったと思えるということは，今どれだけ追い詰められているか，みたいなもんがあるんですよ。それは言えます。

確かに，その時は，避難所出たいとか，早く仮設出たいとか，プライバシーもないとか，狭いとか，まだ小学校やったらよかったけど，仮設なんかでも，3つ布団敷いて寝てても，この子にしたら，お年頃になってくるのにね，プライバシーないし。私らは私らで，夫婦のコミュニケーションもなくなってしまって。夏暑いわ，冬寒いわ，水道管は凍るわで，水でないとか。「避難所より悪いわ，仮設のほうが」と言うてた時期もありました。けど，今となっては，それ，笑い話にできるし，それは，日にちが，年月がたってるから笑えるのかもしれないけどね。

それと，今よりも，心に追い詰められるということがない。分かります？　お金に苦労しなくてもいいという面だけでも，物資的なもんがなくても。それと，子どもを育てなあかんという一生懸命がありますでしょ。今，手離れたら，考えるこというたらね，なくなりますやん。一所懸命やってる時は，いらんこと考えませんやん，育てることで一生懸命。今日はああしたろ，こうしたろ，とか，世話焼くので……。今，それがだいぶんなくなりましたでしょ。まして病気してから，自分のことを考えるようになったから，私ってなんで今更こんなに苦労せなあかんのかなって。だんだん欠点ばっかり見えてくるんですよ。主人の欠点とか，この子の欠点とか。

〔春子さん：もともと欠点とか見つけるのがうまい人やもん。〕

もともと，私，褒めるのがものすごい苦手やから。そんなんで，なんか，ぎしぎししてるんです，自分でも分かるんです。まだ，あのときのほうが生き甲斐みたいな，人のお世話してる生き甲斐みたなんがあったなと思て……。

―人というのは周りの人のことも含めて？

そうそう，周りの人のお話を聞いてあげたり，おばあちゃんが居てはったら，手伝うてあげたり，なんかしてたでしょ，それがなくなった。仮設に居てても，ふれあいセンターに当番ぐらいしか行かないけど，コープさんが共同購入で来たら，こっちに届けてあげたり，八百屋さん来た言うては，みんなで行って，おばあちゃんのとこに持っていってあげる，運んだげるとか。何なと用事があると言ったら語弊があるけど，何なとすることがあったんですよ。今，することがないというのが，すごく，いじける，人間が。

だから昔のことが，すごく懐かしく思えるの。それは，今の状態が，こんなんやから，懐かしく思えるのかもしれん。つらいことは忘れるようになったね。なんべん泣いたか，避難所で，隠れて。気強いようやけどね。人前で泣いたんは，仮設落ちたときやけど，それ以外にも。自分を隠して，みたいのもある。仮設に行ってからも。もともと私，人前で泣かへん人やから。主人の前でも泣かないし。抑えようとするから，だんだんだんだん年取って，ほころびが開いてるのかもしれないけど……。生き甲斐見つけなあかんな，年取ったら。何か趣味とか。それが，目も見えにくくなると手仕事もしなくなるし。もう，作っても誰が使う訳でもないし，とか。大病して急に年とったみたい，する気がおきない……。

春子さんが，つけ加えてくれる。

〔春子さん：あとあれですよ，全部なくすということに対する恐怖感は，普通の人よりは，すごい感

じると思う。〕

それを受けて，大石さんが説明してくれる。

震災になってすぐは，モノを貯めないようにしようとしてたんですよ。貯めてもなくなるんやから，貯めるのやめよう。でも今，貯めてますもん，やっぱり。いざなくなったらどうしよう，オイルショックやないけど，モノがなくなったら困るから，今のうちに貯めとく。この建物は，コンクリートやから，大丈夫やからとか，ここに置いておいたら，何かあっても助かるからとか，そこに全部置いてますもん。うちに来てもうたら分かる，廊下に，ばーんと，ペットボトルの箱ありますでしょ，６本入りの，あれが十何個かね，廊下に積み上げてますねん。スポーツドリンクが６ケースほど，パスタとか，おうどんとか，こんにゃくとか，コーヒーとか，安い時に買うといて，そこにずっと置いとく。お父さんの飲む栄養ドリンクも，野菜ジュースが２ケースくらい，米は20か30くらい常に置いてるからね。次，安かったらもう買うて，足しとこ言うて。冷凍庫も常に一杯ですよ。ちょっとなくなったら，次買うてくるから。安いのしか買いませんけどね。「次いつ安うなんのんか分からんから，買うとこ」（笑）。震災過ぎて仮設入った時，あんまりためなかった。

―震災の前は，そうでもなかった？

前はね，オーブントースターすら押し入れに直す人だったんです，全部手作りのカバー付けて。前にモノ出しときたくないから。だから直せるものは直して，使う時にいちいち出してくるの。あんたどっからトースター出してくんのって言われて（笑）。エアコンでもカバー付けるような人やったのが，お砂糖なんかでも10個ぐらい積み上げてた人が，何にもする気なくなって，震災で。何しても全部なくなってんから，貯めてもしゃあないって。置いとったってしゃあない，その日その日買えばいいんやから。ましてその時は，買えばいいからという気持ちがあった。今は，買えばいいという気持ちになれへんから，買えないから，買える時に買う，いう感じ。

そしてまた，話は今住んでいる市営住宅のことに移っていった。人とのつながりのことである。

生まれて初めて私，町内会いうのか団地の中の役員やったんですよ。いままでＰＴＡの役員もやったことないんです。何にもせずに来て，はじめてそういう役員をやったんですね。全部で48戸。丸１年です。で，結構ね，不良がおって，夜たむろしたりね，今その子らも高校生になって，高校卒業したんかな，おとなしくなってね。その頃，ひとつの部屋の人ともめて，大騒ぎになってね。警察を呼んだりもしたしね。だから，その時に，結構つらい部分，精神的につらい部分，他の役員らと，あったけど，充実してたと今思えますもん。

久しぶりにね，こうやって何か話しできるの，すごい嬉しいんです。

久しぶりに会って，避難所での生活や仮設住宅のこと，そして今日までの心境の変化など，大石さんは，僕に対する配慮もあったのだろうが，今となっては笑えるような沢山のエピソードを用意してくれていたし，それを話しつつ，話していることに付随する別のエピソードを思い起こそうとしていた。途中から加わった春子さんも，大石さんの話に耳を傾けながら，可能な限りで自分自身の記憶や判断を付け加えてくれた。僕も想像できる話であるからこそ，聞くことができた。

９月の平日の昼間，ＪＲの駅の近くのビルにあるファーストフードのフロア。周りの雑音と人の声のなかで，僕たち３人だけは，２時間以上，あの頃のことに浸っていたのである。

土壁の匂い

僕は，そろそろ話を終えようかとしていたが，突然，話題が変わった。

―これから先，何年後かにまた何か変わってたら，思い出すことも変わってくるかもしれませんしね。

そうですね。でも済んだことって，意外と，美化しますでしょ。つらかったことは，だんだん忘れてしもて。でも，今，震災の話してたら，やっぱり，その日のことを思い出しますもん。この子が，土壁の匂い，今でもあかんというのは，それですもん。

〔春子さん：解体作業の瓦礫……〕

埋まってた時。土壁の中に埋まってましたから。

〔春子さん：埋まってんのもあったしね，解体するいう……〕

私も嫌ですもん，今でも。その匂いを，ふっと嗅いだ時。何の時やったかな，言うたことあったけど「これ，あんときの匂いやわ」言うて。誰かと何か

ですれ違うたかなんかでね，その匂いがしたんですよ。

一匂いだけで？

匂いだけで。

一解体やってなくても？

やってなくても。大阪なんか歩くと，人混みでしょ。そうすると何かでその匂いをふっと嗅いだんですよ。「今，土壁の匂いした，あのときの匂いした」言うて。気分がすごく落ち込んじゃう。何か気持ち悪くなってしまう。……それは，やっぱり，消えないですよね……経験したもん者（もん）だけやね，これだけはね。

最後になって，僕が思いもしなかったことが出てきた。避難所に関わっていた時から，地震の現場のことについては，ほとんど聞かなかった。問うことは避けていたし，話がでることも，ほとんどなかった。助け出されたというような外側からの状況説明は幾度か耳にしたが，正面から聞くことはなかった。

3人で話を続けてきて，突然突き付けられた土壁の匂いのことに，僕は返事のしようもなかった。僕は，2人とは全く別の場にいたということに，改めて思い至った。

後日，大石さんに，この原稿の下書きを見てもらった。その際，大石さんは，地震の時のことを次のように書き加えてくれた。

2階建ての建物が1階も2階もぺっちゃんこ。何時間もガスのにおいの中，生き埋めになっていた。やっと近所の人が私の背にある梁（はり）を小さなノコで時間をかけて切り，私たちは助けてもらった。1人がやっと通れる穴から出た時，主人は顔は血だらけ，足からも血が出てる。娘にケガがなくてよかった（女の子だから）。パジャマのまま，近所の人に上着をかけてもらって，ハダシで避難所へ（と言ってもどこへ行けばいいのかわからない）。教えてもらって行く途中，知らない人が靴を貸してくれた。

これに続けて，土壁の匂いのことが改めて記されていた。

頭から土壁をかぶっていたから……。また，この間も，風にのって匂ってきて，吐き気や頭痛など体調を悪くしました。13年もたっているのに……。

13年という時間は，避難所での出来事を笑い話に変えるものではあるが，地震そのものの経験，地震の現場のことを過去のものにするだけの時間ではない。13年前のことは，昔のことではなくて，今のことでもある。地震の経験は「経験した者（もん）」のなかに，そのまま留まり続ける。

（2009年1月21日　未完）